V128c　国際コンソーシアムによる野辺山電波ヘリオグラフの運用 2

増田　智 (名古屋大学), International Consortium for the Continued Operation of Nobeyama Radioheliograph (ICCON)

2014 年度に締結された名古屋大学太陽地球環境研究所 (現・宇宙地球環境研究所) と国立天文台との協定及びコンソーシアム構成機関 (NAOC, KASI, NICT) との協定に基づき、2015 年 4 月 1 日より国際コンソーシアム (ICCON) による野辺山電波ヘリオグラフの科学運用が開始された (https://hinode.isee.nagoya-u.ac.jp/ICCON/ 参照)。本講演では、ICCON による運用の 2 年目 (2016 年度) の運用状況、活動、成果について報告する。装置自体は、1 年を通じて、ほぼ問題なく運用されている。リモートサイトからの web を介した運用システムは、順調に動作しており、1 年目より一カ国増えて、米国、英国、中国、韓国、ロシア、ドイツ、日本の 7 カ国の研究者 (計 30 名) が運用に参加した。この間、ひので科学センター@名古屋は、地球磁気圏などのデータも共通に扱う統合データサイエンスセンター (CIDAS) システムに拡大された。現在、野辺山電波ヘリオグラフのデータは、国立天文台三鷹の太陽データ解析システム (SDAS)、及び、CIDAS システムで保存・管理・公開が行われている。2016 年度は、国際的な活動の推進が顕著であった。まず、2016 年 9 月 9 日-10 日には、名古屋大学で「Solar Physics with Radio Observations - Continued Operation of Nobeyama Radioheliograph -」という国際会議が開催された。参加者は、計 36 名 (うち、海外から 20 名) であり、研究結果のまとめや運用延長期間中における研究テーマなどに関する講演が行われた他、中国の新太陽電波望遠鏡との連携を含めた将来計画に関するパネルディスカッションも行われ、積極的に意見が交わされた。また、中国国家天文台の研究者グループが 2 度に渡り、計 4 週間ほど名古屋大学に滞在し、野辺山電波ヘリオグラフを用いた国際共同研究を推進した。